



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4278 号 2018.3.24 発行

<ともに> グループホーム世話人 (上)

中日新聞 2018年3月21日



入居者の生活を支援する女性 (左)。「命を預かる責任は重いが、自分が支えなければと思う」と話す=滋賀県内で

障害者が地域で暮らす「グループホーム」。そこに住む人たちの暮らしを支えているのが「世話人」だ。入居施設からグループホームなどに生活の場を移す地域移行が進む中、世話人の重要度は増している。しかし、必要な資格や研修制度はなく、仕事内容に明確な定めもない。世話人たちはどんな苦悩を抱えているのか。

滋賀県内のグループホームで世話人をしている女性 (69) は五年前、入居後間もない自閉症の男性 (29) に、廊下で背中を突き飛ばされた。男性は体が大きく、力も強い。女性はうつぶせに倒れたまま床を滑り、柱に頭をぶつけた。頭に手を当てると、血がにじみ出していた。

世話人をするようになって十年目のこと。夕方、廊下で男性と目が合い、にこっと笑いかけてすれ違った直後だった。

病院で三針縫い、しばらくすると痛みは引いた。しかし、再びホームに仕事に行くと男性の顔を見るのは怖かった。だが、休んでいる間、ほかの世話人の負担が増すことを思い、一週間ほどで復帰した。

ホームの入居者は当時、知的障害や自閉症の男女五人。世話人は他の二カ所と合わせて十五人で、全員がパートだった。一つのホームに午後四時から翌朝九時まで一人ずつ泊まり込み、食事を作って食べさせたり、薬を飲ませたり。洗濯などの身の回りの世話もしていた。入居者が外出しない土日は日中の勤務者も必要だし、入居者が体調を崩して付き添いが要ることもある。調整してローテを組み替えるのは大変なことだった。

「入居者の中には、人と目が合うと強い不安にかられる人もいる。それが原因だったと今は分かるけれど、当時は分からなかった」。女性はそう振り返る。

長年、物流会社に勤めた後、短期間だが高齢者施設で働いた。全盲だった母の世話もした。しかし、障害者と関わるようになったのは世話人を始めてから。世話人になるのに資格や経験などの要件はなく、福祉団体主催の講演会が年に数回ある程度。最初の数日間、先輩の様子を見て仕事を覚えた。

地域移行が進み、人に暴力を振るったり、自傷行為をしたりする「強度行動障害」の人たちもホームにくる。力になりたいという思いの一方で、負担が増したと感ずることもあった。

ホームを運営する社会福祉法人が世話人の配置を見直したこともあり、現在は同じ法人の別のホームで月六回、泊まり勤務をしている。入居者は男女二人。自閉症で強度行動障害がある女性 (42) は、気に入らないことがあると腕をギュッとつねってきて、あざが残ることも。突然、世話人の部屋の前に包丁などの台所用品をぶちまけられたこともある。

世話をしようとしても、出ていけばばかりに足を押されることもしばしばだ。

世話人が情報を共有する会議も月一回開かれるが、不安や愚痴は口ににくい。かといって、入居者とは信頼関係ができており、自分が支えなければという思いは強い。辞めるわけにはいかない。

十五年前に一泊九千二百円だった宿泊手当は、国や自治体の補助金が増えたこともあり、今は一万三千二百円。自分の年齢で、これだけの賃金をもらえる仕事は他にないと思う。しかし、女性は言う。「入居者の命を預かったり、自分の身を守ったり。いつ何が起きるか分からず、一人での泊まり勤務は常に不安」 (細川暁子)

<世話人> グループホームで食事作りや体調管理などを行う人で、「キーパー」などとも呼ばれる。障害者総合支援法では、「障害者の福祉の増進に熱意があり、障害者の日常生活を適切に支援する能力を有する者でなければならない」と規定されている。ただ、正職員でもパート職員でもよく、介護や医療などの資格は不要で専門知識を学ぶ研修も義務付けられておらず、仕事内容などもあいまい。ホームで、世話人の夜間配置も義務付けられてはいない。

#### <ともに> グループホーム世話人 (中)



中日新聞 2018年3月22日  
4年前に亡くなった男性の写真を見せながら、グループホームの入居者らと話す世話人の大木亜季さん (右) =名古屋市中川区で

「亡くなるなんて、まったく想像していなかった」。知的障害のある人たちが暮らす名古屋市中川区のグループホーム「シャローム花塚2号ホーム」で世話人をしている大木亜季さん (39) は、二〇一四年六月に亡くなった入居者の男性=当時 (43) =をしのび、目に涙を浮かべた。

大木さんは約二十年前、ホームを運営する社会福祉法人「さふらん会」で、正職員の世話人として働き始めた。男性とはそのころからの付き合いだ。一〇年に設立されたホームに男性が入居してからは、月に十日以上泊まり勤務をこなし、家族のように一層親しくなった。

男性は知的障害があり、心臓の持病もあった。調子が悪くなったのは、ちょうど大木さんが泊まりの日だった。

夜九時ごろ、男性が飲んだ水が、逆流して鼻から出てきた。「いつもと様子が違う」。夜間救急病院に連れて行っただが、男性の容体は悪化し、顔はみるみる青紫色に。集中治療室に入院したが、三日後、大木さんらがみとって息を引き取った。死因は誤嚥 (ごえん) 性肺炎だった。

亡くなる一週間ほど前には、足がむくんで横になると苦しがる症状もあった。病院に行くと、医師は「問題ない」と、徒歩などの運動をさせるように言われた。その通りに、男性をなるべくホームで歩かせるようにしていた。「亡くなった原因は分からないけれど、歩かせて余計に体調が悪くなったのではないかと自分を責めた。周囲からもホームでの生活が原因ではないかと、責められているような気がした」。大木さんは声を落とす。

男性の両親は既に亡くなり身寄りにはなかった。男性の遺体をホームに移し、他の入居者らとお別れ会をして火葬した。遺骨は、島根に住む遠い親戚が引き取った。今もホームの壁には、男性の笑顔の写真が張られている。

世話人には医療や介護の資格は必要とされておらず、大木さんも看護師などの資格を持っているわけではない。だが、入居者の体調が悪と思ったら病院に連れて行き、薬を飲ませるなど命に関わる仕事をする。「万が一のときも、素人判断で対応するしかない。その

人の普段の様子をどれだけ知っているかが、異変に気付くためには一番大事だと思う」と大木さんは言う。

入居者本人だけでなく、その家族も高齢化しており、「親亡き後」への対応も迫られる。現在、ホームには四十～五十代の男女六人が入居。皆、障害支援区分は最も重い「6」かそれに次ぐ「5」で重度の知的障害がある。

ある女性（50）は昨年十二月に、父親を亡くした。女性と父親は、他の家族とは疎遠だったため、四年ほど前に女性の父親が入院した時には、大木さんが二日に一回、病院に行き洗濯をした。父親の死後、大木さんは女性と一緒に葬儀に参列。その後、父親の財産の手続きで女性の印鑑証明書が必要となり、大木さんは女性に付き添って役所にも行った。

世話人の仕事内容は定められているわけではなく、マニュアルはない。どこまでやるべきなのかという迷いは常にある。仕事とプライベートの線引きも曖昧になりがちだ。しかし、大木さんはこう話す。「信頼関係を築いてきた入居者やその家族が困っているのを見ると、やっぱり放ってはおけない」（細川暁子）

## <ともに> グループホーム世話人（下）



中日新聞 2018年3月23日  
咲凜ちゃんを連れて泊まり勤務をする大木亜季さん（左端）。パート職員の柘植茂子さん（右端）や入所者たちと談笑する＝名古屋市中川区で

午後六時、夕飯の時間。知的障害のある人たちが暮らす名古屋市中川区のグループホーム「シャローム花塚2号ホーム」で、入居者たちがテーブルを囲んだ。世話人の大木亜季さん（39）の傍らでは、娘の咲凜（えみり）ちゃん（3つ）がにこにここと笑みを浮かべていた。

月に十回近くホームで泊まり勤務をこなす大木さんは、咲凜ちゃんとの時間も大切にするため、子連れで出勤している。咲凜ちゃんはホームの人気者。入居者たちに「みんな笑って」と呼び掛けると場が和む。こうした穏やかな日常は、手厚い世話人の配置によって支えられている。

ホームには、障害支援区分で最重度の「6」とそれに次ぐ「5」の知的障害の男女六人が入居している。国の基準では、入居者六人に対して一人の世話人が付けばいいことになっているが、このホームでは正職員の世話人に加え、主婦や学生らパート職員二～三人も一緒に泊まり込む。

ホームを運営する社会福祉法人「さふらん会」が市内に設置しているホームは、ここを含めて六つ。入居者計二十五人に対し、世話人は正職員十人とパート職員約三十人で計約四十人がいて、ローテーションを組んで入所者たちを世話している。

こうした人員配置ができるのは、国の補助金に加え、名古屋市独自の補助制度があるからだ。二〇〇六年の障害者自立支援法（現障害者総合支援法）施行後、障害者の暮らしの場を入所施設からグループホームなどに移す地域移行が本格化した。それに伴い市は、ホームを運営する事業所に補助金を交付している。支援区分が重い障害者を多く受け入れるほど、補助金は多くなる。市は一七年度は約六十カ所の事業所に、計約二億五千万円を補助した。

さふらん会が市から受ける人件費の補助金は、年間約千五百万円。法人管理者の繁原幸樹さん（35）は「自治体が独自に人件費を補助している例は全国でも珍しく、他の地域の運営者からうらやましがられる」と話す。

パート職員の時給は、三カ月の試用期間中は九百円だが、その後は千円になり、泊まり勤務は一回約一万二千元が支払われる。入ったばかりのパート職員が慣れないうちは、正

職員を多めに配置するなどして、一人で責任を抱え込まないように体制を組んでいる。

ただ、それでも人手は常に足りない状態だ。今月、七人いた学生のうち、四人が大学を卒業し辞めてしまった。求人誌に募集広告を載せても、泊まり勤務や責任の重さから敬遠されがちで、あまり効果がない。派遣会社から紹介を受けたこともあったが、最初から仕事に来なかったりすぐに辞めてしまったりだった。

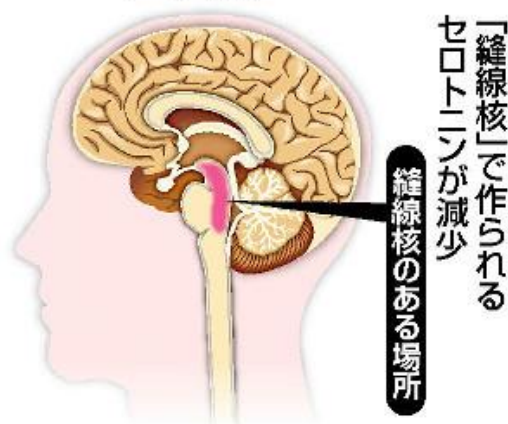
パート職員の柘植茂子さん（75）は十五年前からホームで働いている。今も月に十回以上泊まり勤務をこなす。入居者がトイレを詰まらせて廊下が水浸しになるなど、夜間にトラブルはしょっちゅう起きる。だが、「私以外にも泊まっている人がいるので、相談できる相手がいて安心感がある」と話す。

大木さんらは、県内の別の事業所のグループホームの世話人たちとも二カ月に一回集まって、情報交換をしている。「世話人には常に緊張感がつきまとい、臨機応変に対応しないといけないので孤独を抱えがち。愚痴を言い合える仲間が大事」と言う。（細川暁子）

## 発達障害「自閉スペクトラム症」解明進む…セロトニン減少、発症に関与か

読売新聞 2018年3月23日

### ◆遺伝子分析で浮上した ASDの要因例



発達障害の一種で、対人関係を築くのが不得意な「自閉スペクトラム症（ASD=autism spectrum disorder）」について、発症の仕組みを脳科学的に解明する研究が進んできた。治療薬の開発などにつながると期待されている。（竹内芳朗）

自閉症、アスペルガー症候群などの総称…国内100万人以上

ASDは、一般には「自閉症」「アスペルガー症候群」などと呼ばれる症状の総称。人口50～100人に1人の割合に上り、日本では計100万人以上とみられる。男性が女性より数倍多い。全体として▽コミュニケーションが不得意▽普段と違う行動を嫌がるなど、こだわりが

強い▽視覚や聴覚など五感が非常に敏感、あるいは鈍感——といった特徴がある。社会生活で苦勞することが多い一方、特定の分野で優れた才能を発揮する場合もある。

ASDは、脳機能の障害が主な原因と考えられ、15番染色体の遺伝情報に変異のある例が知られている。理化学研究所脳科学総合研究センターの内匠透シニア・チームリーダーらは、マウスの染色体にヒト同様の変異を生じさせたところ、鳴き声で母親と意思疎通するのが苦手であるなど、ASDに似た特徴が行動に表れた。

そこで、脳の働きを詳しく調べた結果、脳幹にある「縫線核」という部分の働きが低下し、ここで作られる神経伝達物質で、不安な気持ちを落ち着かせるなどの作用がある「セロトニン」の量が減っていた。このマウスの乳児期にセロトニンを投与すると、ASDに似た特徴が改善したという。成果は昨年6月、米科学誌「サイエンス・アドバンス」に発表された。

また、ASDの人の遺伝子分析などから、発症に関与する可能性がある新たな変異も見つけ、昨年8月に論文を発表した。脳内で神経細胞のつなぎ目「シナプス」がうまく形成されなくなり、脳神経の情報伝達に支障が出るのではないかとみられている。

内匠さんは「脳の様々な部位で遺伝子変異による機能障害が起き、ASDにつながる可能性がある。さらに詳しく調べたい」と言う。

**【発達障害】** 自閉スペクトラム症のほか、読み書きや計算が苦手な「学習症（LD）」、衝動的に行動しがちな「注意欠如・多動症（ADHD）」などがある。症状のタイプや程度

は一人ずつ違い、複数のタイプを併発することもある。

### 他人への信頼感高めるホルモン「オキシトシン」、効果を見極め

険しい表情と口調で「良かったね」と言われた場合、多くの人は言葉を額面通りに受け取らず、「この人は敵対的だ」と感じる。だが、ASDの人は表情や口調をあまり気にせず、「良かったね」という言葉に引きずられ、「この人は友好的だ」と考えやすい。

浜松医科大学の山末英典教授らは、ASDの成人男性15人と、そうではない成人男性17人を対象に、ビデオに収めた相手の表情や口調、言葉から、その人が敵対的か友好的かを判断してもらう実験を実施。その時の脳の活動を機能的磁気共鳴画像（fMRI）で観察した。その結果、ASDの人はそうでない人に比べ、判断の際、「内側前頭前野」と呼ばれる部位の活動が弱いことを突き止めた。この部位は様々な情報を統合して行動を調節する機能を担うとされている。

山末さんらは、他人への信頼感を高めるとされるホルモン「オキシトシン」をASDの成人男性40人に点鼻で投与してみた。すると、内側前頭前野の活動が活発化。再びビデオの実験を行った結果、言葉よりも表情や口調から相手の心の内を読み取る行動が増えた。

オキシトシンは、信頼関係を改善させる効果が十数年前に海外で報告され、注目を集めてきた。山末さんらは先月末、成人男性を対象に、オキシトシンでASDを治療する臨床試験（治験）を始めた。有効性だけでなく、副作用の有無など安全性も慎重に確かめる。オキシトシンは子宮を収縮させる作用もあるため、女性は今回の治験対象から外したが、山末さんは「有効性と安全性が確認できれば、将来的には女性や子どもにも使えるかどうかを検討する」と話す。

【オキシトシン】 脳の視床下部で合成され、下垂体から分泌されるホルモン。日本では陣痛促進剤として臨床応用されている。海外では母乳分泌の促進剤としても使われる。

### 発達障害で孤立、支援の窓口を紹介

ASDの原因は、研究が進んできたものの、依然、未解明の部分が多い。

理研の内匠さんは「ASDには、様々な要因が複雑に絡み合っている」と説明する。例えば母親が妊娠初期に喫煙したり、妊娠中に有害物質を摂取したりすることで、子どもがASDになる確率が上がるとの報告がある。子どもが栄養不足だったり、ある種の腸内細菌がいたりすることも関連が指摘されている。

ASDを含む発達障害の人は、学校や職場で人間関係につまずき、孤立することも少なくない。適切な支援を受けられるよう、親などが早期に気づくためのヒント、相談窓口などを、国立障害者リハビリテーションセンター「発達障害情報・支援センター」がウェブサイト（<http://www.rehab.go.jp/ddis/>）で紹介している。

浜松医科大学の山末さんは、「発達障害について正しい理解を広め、発達障害の人もそうでない人も共に暮らせる社会づくりを進めることがとても重要だ」と話す。

### オキシトシンの働き



### 看護師や医師の2割、残業代を請求せず「言えない雰囲気」

朝日新聞 2018年3月23日

看護師や医師の2割が残業代を職場に請求していない——。日本医療労働組合連合会が22日、医療現場の時間外勤務の実態についてこんな調査結果を公表した。病院などに対

し労働時間管理の徹底を求めるとともに、啓発活動の強化が必要だとしている。

昨年9月から今年1月にかけて、医療現場で働く1万1189人に退勤時間や残業代請求の有無について聞いた。

調査日に残業をしていたのは61%。一方、残業代を「すべて請求している」としたのは36%、「一部している」は36%、「していない」は20%だった。

理由として「請求できない雰囲気」「請求できると思わなかった」「上司に言われている」などが挙げられた。若い人ほど残業代を請求しづらく、未払いが違法だと認識していない傾向があるという。

医労連の温井伸二書記次長は「高校や大学で働くルールの教育も必要だ」と指摘している。(野中良祐)

### 母親離席で「うんこか」特別支援学校校長、いじめ協議中に ボイスレコーダーに音声が残った 産経新聞 2018年3月23日

大阪府立の特別支援学校で女儿(11)がいじめに遭った問題の対応を協議するため、平成28年5月に女儿宅を訪れた50代の男性校長が、トイレに立った母親(48)について、同席した教諭らに対し「うんこか」「お礼を言ってすぐ終わらそう」などと発言したとみられることが22日、分かった。協議内容を録音するために母親が置いたボイスレコーダーに音声が残っていた。

校長は同日、母親と面会し「発言は記憶にないが、不信感を招いてしまった」と謝罪。取材に「(録音を聞くと)言っているようにも聞こえる。傷つけてしまい申し訳ない」と話した。

校長は母親と担任のメールのやりとりを確かめるため、教頭や教諭と大阪市の女儿宅を訪問した。

女儿はこの校長の特別支援学校でいじめを受けて体調不良を訴え、小学2年と3年の時にそれぞれ年間30日以上欠席。4年になった28年4月に別の特別支援学校に転校し、心的外傷後ストレス障害(PTSD)の診断を受けた。現在5年生。

府の第三者組織「大阪府立学校いじめ防止対策審議会」が29年7月からいじめや学校の対応を調査。母親が音声を聞き直して発言に気付いた。

### 川崎3人転落死 元施設職員に死刑判決 横浜地裁 自白の信用性認める

東京新聞 2018年3月23日



#### 今井隼人被告

川崎市幸区の介護付き有料老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」で二〇一四年に入所者の男女三人を相次いで転落死させたとして、三件の殺人罪に問われた元職員今井隼人(はやと)被告(25)の裁判員裁判の判決で横浜地裁は二十二日、「落ち度のない三人の尊い命を奪った結果はあまりに重大」と求刑通り死刑を言い渡した。

任意段階や逮捕直後に三人の殺害を認めた自白の信用性が争点。今井被告は逮捕後間もなく黙秘し、公判で無罪を主張していた。弁護側

は即日、控訴した。

判決理由で渡辺英敬(ひでたか)裁判長は、二カ月で三人が転落死したのは「偶然では説明が難しい」と述べ、殺意に基づく連続殺人事件とした。今井被告が同僚に二人目以降の殺害を予告するような発言をしたことを、犯人とうかがわせる事情と指摘。捜査段階の自白は「現場の状況に合致し、取り調べに圧力や誘導はなく記憶に基づいている」とした。

動機については「日々の業務から生じた鬱憤(うっぷん)」から一人目を殺害し、その際の救命措置が同僚に評価されたため「称賛を得る機会」と考えて二、三人目を殺害したと

した。渡辺裁判長は「真実を知りたいと願う遺族の思いをよそに不合理な弁解に汲々（きゅうきゅう）とし、反省の態度はみじんも見えない。極刑はやむを得ない」と非難した。

判決によると、今井被告は一四年十一月に丑沢（うしざわ）民雄さん＝当時（87）＝をベランダから転落させて殺害。十二月に仲川智恵子さん＝同（86）＝と浅見布子（のぶこ）さん＝同（96）＝を同様に殺害した。

弁護側は三人は事故死や自殺の可能性がある」と主張。警察官の圧力で虚偽の自白をしたとし、仮に犯人としても発達障害で心神耗弱か心神喪失だったとして死刑回避を求めている。

### 【障害者施設傷害事件】理事長が辞任 騒動の責任取り 下野新聞 2018年3月23日

社会福祉法人「瑞宝会」（宇都宮市下栗町）が運営する知的障害者支援施設「ビ・ブライト」（同市西刑部町）で昨年4月、入所者男性が重傷を負った傷害事件などを巡り、同会理事長だった土屋和夫（つちやかずお）氏（59）が一連の騒動の責任を取り辞任していたことが22日までに、同会などへの取材で分かった。後任は同会評議員だった三上公博（みかみきみひろ）氏（60）。

同会によると、2月7日に理事長と理事の辞任届が提出され同9日、緊急理事会を開いて了承したという。現在は一般職員で経営には携わっていない。土屋氏は2002年の同会設立当初から約15年間、理事を務めていた。

### 元名大女子学生の控訴審判決・解説 一審踏襲、「重い精神障害」弁護側主張退け

産経新聞 2018年3月23日

殺人罪などに問われた元女子学生（22）の控訴審判決で、名古屋高裁は「重い精神障害があり、責任能力を問えない」とする弁護側主張を退けた。発達障害や精神障害が与えた影響は一定程度にとどまるとし、完全責任能力を認めた一審判決を全面的に踏襲した形だ。

刑事裁判では、責任能力の有無は精神障害の程度を慎重に検討した上で、その障害が犯行時、善悪の判断や行動の制御能力にどれだけ影響したかを総合的に評価して判断される。

一審判決は元女子学生には発達障害があり、当時、双極性障害（そううつ病）による軽いそう状態だったと認定する一方で、影響については「冷静な状況判断の下、合理的な行動をしていた」などとして限定的と結論付けた。

この判断を巡って、控訴審で弁護側は「精神障害の症状は重く、事実誤認がある」と主張。専門家の証人尋問が行われ、高裁も慎重に検討したものの、事実認定は覆らなかった。

一審判決は長期服役後の仮釈放に言及するなど、更生への可能性に配慮した面もあった。「刑事施設での専門的な治療は不可能」との指摘もある中で、今後適切な治療をどう施すか議論が必要だろう。

### 「不登校も子の権利」 子ども相談室の内田さん、主体性尊重を訴え

琉球新報 2018年3月23日

不登校と引きこもりの子どもについて語る心理カウンセラーの内田良子さん＝16日、那覇市の県総合福祉センター

子ども相談室「モモの部屋」主宰で心理カウンセラーの内田良子さんを講師に招き不登校と引きこもりの子どもたちについて考える講演会が16日、沖縄県那覇市の県総合福祉センターで開かれた。内田さんは「子どもが学校に行くことは義務ではなく権利」「子どものプライバシーは子ども自身のもの」と話し、参加者らに子どもたちへの理解を呼び掛けた。



現在の学校の状況を「キチキチの管理社会」と内田さんは語る。休み時間や給食時間などを削り、道徳や英語などの新しい教科を次々と詰め込んでいる状況に対して「子どものストレスがたまるのは当然だ」と訴えた。子どもの登校拒否は、子どもが選んだ権利であるが、日本の保護者は「学校信仰」が強く、それが子どもたちへの圧力や負担になっているという。

また昨年2月から施行された「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律（教育機会確保法）」と連動して、学校復帰への圧力の高まりもあると懸念した。「休ませてあげる選択を受け入れるべきだ。わが子を信頼できるのは保護者だけ。信頼できる人が身近にいてだけで自分自身の回復につながる」と強調した。

参加者から、小学校低学年から登校拒否をしている孫の学力を心配する声が上がると、「家庭での学習で十分対応できる」と述べ、ベトナムの少女が漫画から日本語を覚えた例などを紹介した。そして「学校に行きたくないという意思表示がきちんとできる主体性を持った子だ。家では学校のことを話題にせず、伸びやかに過ごさせてあげて」とアドバイスした。

また、「管理社会」である学校から排除され、「発達障害」などと診断された児童に多量に処方される薬にも警鐘を鳴らした。「子どもは生命の塊で、じっとしてられないのが当たり前」にかかわらず、学校現場では「黙食（静かに食事）」「黙動」などと行動が抑制されており、学校の決まりに反した行動をする子に「発達障害」などのレッテルが貼られていると指摘した。そのような子どもが学校からの勧めで医師の診断を受け、薬が処方されるという。「日本の保護者は学校に忠実で、医者信仰も厚い。しかし薬によって、ダメージを受けるのは子どもだ」と語った。子どもの特性を見極め「親の会」など地域からの情報を得ることの大切さも訴えた。

講演会を主催した「不登校りべるた沖縄」は不登校に関する相談のほか、会への参加を呼び掛けている。問い合わせは眞眞さん（電話）098（947）6856、メール [liberta.okinawa@gmail.com](mailto:liberta.okinawa@gmail.com)

## 石井十次賞に埼玉の乳児院 3000人以上養育

読売新聞 2018年03月23日



柴崎施設長（石井十次顕彰会提供）

児童福祉に貢献した個人や団体に贈る今年の「石井十次賞」に、埼玉県寄居町の乳児院「康保会玉淀園」が選ばれた。公益財団法人・石井十次顕彰会（高鍋町）が22日、発表した。

高鍋町出身の石井十次（1865～1914年）は日本で最初に児童養護施設を開設し、「児童福祉の父」と呼ばれた。

玉淀園は戦後間もない1947年、全国の乳児院の先駆けとして開設。これまでに3000人以上の子どもたちを養育し、児童福祉の向上に貢献した。

同園の柴崎順三施設長は「児童福祉に携わる者として石井十次賞ほどうれしい賞はない。今後も力を尽くしたい」とのコメントを出した。贈呈式は4月10日に高鍋町で行われる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行